

## ■大澤壽人 チェロとピアノのためのソナタ ト長調



大澤 壽人

写真提供：神戸女学院所蔵資料  
「大澤壽人遺作コレクション」

### 大澤壽人（おおさわ・ひさと）略歴

1906年8月1日兵庫県神戸市に生まれる。関西学院高等商業学部卒業後1930年に渡米。ボストン大学、続いてニューイングランド音楽院でフレデリック・コンヴァースに学ぶ。交響曲・協奏曲・室内楽作品など数多くの演奏会作品に取り組み、ボストン大学卒業時の1933年にはボストン交響楽団(ポップス)を率いて自作《小協奏曲》を披露した。同楽団を指揮した初の日本人である。

1934年パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェに師事。翌年にはコンセール・パドゥー管弦楽団を自ら指揮して《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》《さくらの声》を発表する。前衛的な作風と緻密な指揮で大成功をおさめるなど、その華麗な経歴は当時の日本人としては稀であった。

1936年に帰国した後は神戸女学院の教壇に立つ。放送用音楽、舞台付隨音楽、映画音楽、ジャズ風の協奏曲から校歌に至るまで、幅広いジャンルにおいて多彩な作品を創作した。作曲家・編曲家・指揮者、そしてラジオプロデューサーの役割まで担いながら実力派として活躍。800曲以上を遺し、1953年10月28日に47歳で急逝した。

2003年の代表作CDリリース以降、戦前・戦後の日本洋楽史における重要な作曲家兼指揮者として、その再評価が急速に進んでいる。

戦前・戦後に輝く足跡を残した作曲家兼指揮者として、今再び注目を集めている大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）は、1930年9月に米国に留学した。

《チェロとピアノのためのソナタ ト長調》は1932年10月に完成した初期作品の一つ。翌1933年1月ボストン日本協会主催の作品発表会に於いて、G・ブラウン(Vc)とF・ティロットソン(Pf)によって初演され、この演奏会の成功によって、大澤は世界的に通じる作曲家になりたいと意欲を燃やすようになった。その意味においても重要な作品で、4楽章で構成されている：第1楽章 アレグロ・モデラート、第2楽章 アンダンテ 愛情をこめて：印象派的に、第3楽章 レシタティーヴォ、第4楽章：スケルツォ。

若き作曲家が精魂を傾けた作品は力感にあふれ、ことに第3楽章には当時まだ珍しかった四分音が使用されている。また、この後大澤はオーケストラ作品を中心に一連の大作を次々完成していくが、ピアノパートには既に、オーケストラ楽器の音色や運動性に対する鋭い感覚が反映されている。

今宵は創作から実に77年を経た演奏である。

生島美紀子（大澤資料プロジェクト）